

博士論文要旨 コンスタンチン・バリモントの前期作品における抒情的「私」の研究
間テクスト性という視点から

執筆者：寒河江 光徳

はじめに

序章 この論文の視点

1. ロシアにおける無神論の遺産相続人
2. バリモントの「私」についての問題
3. 「翻訳者・詩人」という私

第2章 レールモントフとバリモント

1. レールモントフとバリモント
2. レールモントフの「帆」とバリモントの「倦怠の丸木舟」
3. ロマン主義的な「自然と私」の対比について
4. まとめ

第3章 ボードレールとバリモント

1. ボードレールとバリモント
2. ボードレールのコレスポンダンス
3. 共感覚
4. 普遍的類推
5. まとめ

第4章 ポーとバリモント

1. ポーとバリモント
2. 「構成の原理」から読む「大鴉」と「雨」
3. 「鐘の様々」と「炎への賛歌」
4. まとめ

第5章 ゲーテとバリモント

1. ゲーテとバリモント
2. バリモントにとっての「ゲーテ」
3. ゲーテとバリモントの「見る」ということ
4. ゲーテにとっての「超人」とは

終章 バリモントの作品における抒情的「私」と他の詩人の作品における「私」との比較考察

1. 分析の視点
2. バリモントの作品における抒情的「私」について
3. パステルナークの詩「ハムレット」の場合
4. ヴォズネセンスキーの「ゴヤ」の場合
5. まとめ

おわりに（結論）

この博士論文は、バリモントの前期作品における「抒情的『私』」について研究するものであるが、バリモントの「私」の考察に「翻訳者・詩人」という観点を盛り込み、バリモントが「超人」と仰いだ詩人たちの綴るテクストとの関係性を考察し、作品分析をおこなった。また、バリモント以降に活躍したロシアの詩人のテクストにおける「抒情的『私』」とバリモントの作品における「私」を比較考察した。

バリモントの「私」は単なる「詩人のイメージ」ではなくて、「非・人格」化された形象にまで、発展する。そのような現象をバリモントの「私」の超人化と表現していいのであるならば、その現象は、『太陽のようになろう』と言う作品以降に現れはじめる、とってよい。バリモントの超人的「私」を考察するために、バリモントが超人と呼んだ「詩人」たちとの間テクスト的な視点から、分析をおこなう。そして、その上で、バリモントの「抒情的『私』」の特徴について、考察する。

序章において分析のための視点を語り、第2章から第5章まで、バリモントが最も敬愛した詩人たちの中で、レールモントフ、ボードレル、ポー、ゲーテ4人の作品を選び、それらの詩人に見られる創作手法を詩人バリモントがどのように自身の作品に生かしているか、創作手法を比較した。

抒情詩における登場人物としての「私」について述べる際、ユーリー・トゥィニャーノフによって「抒情的主人公」という語がはじめて使用された。この「抒情的主人公」は「ブローク」と題する一文の中に用いられた概念であり、バリモントの作品における「抒情的主人公」という研究も既になされている。

トゥィニャーノフの指摘によると「ブローク」の「抒情的主人公」は常に「詩人」という擬人化されたイメージに集約される。それに対して、ギンズブルク、コールマンは、「私」と「詩人」(作者)は切り離されるべきであるとし、「抒情的主人公」に別な解釈を与えた。

イノケンティー・アンネンスキーによって論じられたバリモントの「抒情的『私』」について考えると、ギンズブルクやコールマンのいう「抒情的主人公」とも違っている。アンネンスキーによると、バリモントの「私」の特徴は私そのものが詩行に一体化する。「私」

が「詩人」というイメージから独立するのみならず、「詩行」という非・擬人化されたイメージにまで発展するところに、バリモントの「私」の特徴があるのではないだろうか。

本論では、バリモントの「私」の研究に新しい解釈を加えるために、「間テキスト性」という視点を導入する。

「あるテキストが別のテキストとの関係を作り上げる仕方にはさまざまなものがある。パロディー、文体模倣、主題模倣、間接的言及、直接的引用、構造的平行関係、など。理論家の中には、間テキスト性こそ文学の条件であり、作者が意識しようがしまいが、すべてのテキストは別のテキストの繊維で織り成されていると信じているものもある」（デヴィッド・ロッジ『小説の技法』白水社）

バリモントによって織り成されたテキストが、詩人が自ら読み親しんだ作品群の複数の糸によって紡がれた織物であり、そこにはさまざまな作品のパラフレーズ、引用、暗喩があり、さまざまな詩人や作家の読後追想の表象であることは、否定するものはいない。

バリモントは詩人であると同時に、詩の翻訳家でもある。バリモントが無類の旅行家であり、多言語使用者であり、翻訳であると同時に詩人であることは、周囲に認められた事実である。問題は旅行であり、翻訳家であるという事実が、バリモントが詩人であるという事実と、どのような相関性をもっていることなのか？

バリモントが最も敬愛した詩人たちの中で、レールモントフ、ボードレール、ポー、ゲーテ 4 人の作品をピックアップし、それらの詩人に見られる創作手法を詩人バリモントがどのように自身の作品に生かしているか、つまり、創作者「書き手」であると同時に、「読み手」の「私」を分析した。

第2章 レールモントフとバリモント

レールモントフの代表作「帆」についてのロートマンの注釈を元に、バリモントの「倦怠の丸木舟」と比較考察した。ロートマンは、「帆」の空間構造を垂直軸と水平軸で捉えているが、バリモントの作品にも類似した構造が見て取れる。また、「沼の睡蓮」という作品の中にも似た空間構造がある。両者の作品に共通する特徴として、「私」がテキストの表面上にはあらわれていないことである。しかし、いつしか、描写する対象と詩人の気持ちが一体化しているという点で共通点がある。また、レールモントフの「太陽」とバリモントの「ベアトリーチェ」との比較考察を行った。

第3章 ボードレールとバリモント

ボードレールの詩学ともいべきコレスポンドの2つの要素、「普遍的類推」と「共

感覚」という視点からバリモントの作品を分析した。ボードレールの「照応」における「匂い」の増幅するイメージは、バリモントの「太陽の香り」と類似している。ボードレールの「猫たち」をヒントに、バリモントは、「私の猛獣たち」を書き上げ、「猫たち」に見られる隠喩、換喩の技法を駆使している。

第4章 ポーとバリモント

ポーの作品「大鴉」、「構成の原理」をバリモントはロシア語に翻訳している。「構成の原理」とはポーがどのように「大鴉」を作ったか、その創作技法を自ら明かした論文である。この論文に書かれてある視点からバリモントの「雨」を読んでもみると、バリモントは、「構成の原理」に述べられた手法を用いて、作品を綴っているのが分かる。また、同じくバリモントによって翻訳が手がけられた「鐘のさまざま」と「炎への賛歌」の作品構成上の類似点を明らかにした。

第5章 ゲーテとバリモント

バリモントは自らの散文の中で、「超人」という語は、ニーチェ以前に、ゲーテや他のロマン主義者たちによって使用されていたことを述べている。バリモントがニーチェの作品に親しんでいたことは否定する余地がないが、もしかすると、ゲーテの作品の中に、すでに超人思想の兆候を見出していたのかもしれない。ゲーテの詩とバリモントの詩を比較し、ゲーテの「見ること」についてのバフチンの言説を紐解きながら、「空間的限界」の中に「時間的無限」を見出す詩学を、ゲーテとバリモントそれぞれの作品の中に見出した。

終章 バリモントの作品における抒情的「私」と他の詩人の作品における「私」との比較考察

終章において、ロシア詩学において、そのようなバリモントの「抒情的『私』」がどのような意味を持つかについて、パステルナーク、ヴォズネSENSキーの代表的な作品と比較して、考察した。最後に何が言えたか？バリモントの「私」といえど、それは一言で論じられるものではない。アンネンスキーが述べた、バリモントの「私」の特性は、その「私」がバリモント個人とは独立したイメージであり、単なる擬人化された「詩人」というイメージにとどまるものではない、ということである。しかし、それは「詩人」というイメージが全く消えてしまったということにならないと筆者は思う。むしろ、バリモントの「私」は詩行ごとに形を変えていく。時折、「詩人」の姿を見せたかと思うと、「四大」との交感によって、「詩行」といつしか一体となり、非擬人化された形象に変わることも有る、ということである。